様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　５ 月　５ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2019
課題番号：１５ＫＫ００５２

研究課題名（和文）啓蒙期から現代に至るカタストロフィの思想と表象に関する総合的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Comprehensive Research on Philosophy and Representation of Catastrophe(Fostering Joint International Research)

研究代表者
西山　雄二（NISHIYAMA, YUJI）

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：３０４６６８１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,344,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究では、各国の研究協力者との共同によって、とりわけ18世紀啓蒙期から近代産業化、21世紀現在に至るまでの文献（主に思想と表象）を系譜学的に辿り直し、批判的な考察を加えつつ、カタストロフィの概念の規定や解釈の比較、表象の分析を行った。フランス東洋言語文化大学に長期滞在することで、主にヨーロッパにてセミナーと国際会議を共同で開催し、国内・海外の研究機関・研究者と学際的に連携することができた。カタストロフィに関する思想と表象に関する共同研究の成果は、日本語・フランス語・英語で多数公表され、学会発表も活発におこなわれた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
カタストロフィ（破局）は、人間、自然、文明、歴史、進歩といった概念や現実の根本的な再考を促す歴史的契機である。自然科学や社会科学の実践的な知とは異なり、人文学によるカタストロフィへの理論的アプローチの特性は、カタストロフィにまつわる概念や言葉、修辞の分析を通じてその諸相を描き出せること、想像や虚構のイメージを介して現実を迂回して考察しうること、生と死の狭間で宗教的な問いを論究しうることである。本研究では、フランスを拠点として、国内外の人文学研究者らと国際的な共同研究を形成することができた。

研究成果の概要（英文）：My research achievements consist to analyze the concept, interpretation, representation of catastrophe. I traced the history of the documents on catastrophe (especially in philosophy and literature) from the 18th century to the present. In order to explore the problem of catastrophe, I stayed for a year as a visiting professor at the National Institute of Oriental Languages and Civilizations in Paris and tried to collaborate more effectively with scholars or researchers in organizing seminars and symposiums in Europe. The research results were released in Japanese, French or English in many publications, at academic meetings.

研究分野：人文学

キーワード：カタストロフィ　リスク　災厄

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、科研費基盤研究 C「啓蒙期から現代に至るカタストロフィの思想と表象に関する総合的研究」（2015～17 年度）のもとで研究を展開してきた。カタストロフィ（破局）は、人間、自然、文明、歴史、進歩といった概念や現実の根本的な再考を促す歴史的契機である。研究の目的は、人文学（主に思想と表象の学問分野）の文献や理論の検討、実地調査にもとづいて、これまで人間はいかにカタストロフィを表象し思考し解釈してきたのかを問い、カタストロフィと人間の関係を根本的に考察することである。

東京電力福島第一原発事故を受けて、「フクシマ」という固有名は全世界で通用するようになった。それ以前から自然科学分野では原子力をめぐる国際的な共同研究がなされているが、人文学において、これに見合うほどの国際規模の研究は展開されていない。ただ、カタストロフィの研究はフランス語圏で質・量ともに群を抜いており、しかもそれらの研究が十分日本に紹介されていない。こうした理由で、フランスにて国際共同研究を展開し、またヨーロッパ各国との学術ネットワークを有効に活用できる点で、本研究はフランスでの研究滞在をおこなった。

２．研究の目的

本研究の目的は、カタストロフィに関する人文学的研究のさらなる国際共同展開である。各国の研究協力者との共同によって、とりわけ 18 世紀啓蒙期から近代産業化、21 世紀現在に至るまでの文献を系譜学的に辿り直し、批判的な考察を加えつつ、カタストロフィの概念の規定や解釈の比較、表象の分析をおこなった。

具体的な研究項目は、①カタストロフィと人間の関係を理論的に解明することである。自然科学は個々の災害の物理的原因やメカニズムを、社会科学はその社会への影響や相互関係を明らかにする。これに対して、人文学的研究は人間がカタストロフィをいかに解釈し思考し表象してきたのかを考察することで、人間と自然、人間と技術の在り方を根底的に問うことができる。②また本研究は、日本に十分に紹介されていない国内外（主に英語・仏語・独語圏）のカタストロフィ研究の成果を分析・整理する。③そして、先行研究の批判的検討を通じて、また他の学問分野との学術交流によって、カタストロフィの人文学的研究に理論的・実践的な広がりをもたせる。狭義の人文学研究の枠にとどまらず、科学的客観知を援用するために、社会科学・自然科学との学術連携を適宜行う。日本ではほぼ未成熟なカタストロフィの人文学的研究の視座や可能性を国際共同研究によって呈示することが最終的な目的である。

３．研究の方法

研究協力者と密接に研究を進めるために、2017 年 8 月～2018 年 8 月の 1 年間、フランス・パリに滞在し、国立東洋言語文化大学を拠点として国際共同研究を実施した。国内・海外の研究機関・研究者と学際的に連携しつつ、カタストロフィをめぐる人文学的研究のネットワーク形成をおこなった。

４．研究成果

1）国際会議の主催

フランス・パリの国立東洋言語文化大学を拠点として、数々の国際会議を主催することができた。国立東洋言語文化大学の日本学センターはヨーロッパでも随一の日本学拠点であり、同センターの研究者の好意的な協力もあり、日仏の共同研究の促進には最適の環境であった。

・2018 年 3 月にパリのコロンビア大学で国際会議「目の前のカタストロフィ（La Catastrophe devant soi）」を企画し、日仏の研究者らが破局に関する発表をおこなった。カタストロフィ研究の泰斗 Jean-Pierre Dupuy、リスク社会学者 Frederick Lemarchand 、人類学者 Yoann Moreau を招聘して、充実した議論を交わすことができた。研究代表者は、学術発表「福島の憑在論」において、東北被災地での幽霊体験の証言から、生死の閾を表象する文学の可能性を考察した。いとうせいこう『想像ラジオ』における死者と生者の共存のヴィジョンを、柳田国男『先祖の話』や夢幻能の事例を参照しつつ、ジャック・デリダの憑在論とからめて研究をおこなった。カタストロフィに直面した社会は犠牲者たちの鎮魂の試練に曝され、その文化が伝統的に育んできた追悼の方法が試される。生と死のあいだで喪のいかなる文化装置を想像し洗練させるかは、人文学こそが深めることのできる問いであるだろう。

・2017 年 11 月にブルガリア・ソフィア大学で国際会議「世界の破壊と創造」を実施した。首都大学東京（当時）の教員らが日本をめぐる社会分析、近代文学、比較人類学などに関する研究発表を披露した。ジョルダーノ・ブルーノの無限宇宙論とボヤン・マンチェフの世界の終焉論の比較、古代ギリシアにおける循環的時間論（宇宙論的循環、気候的循環、政治的循環）、中

世ドイツの英雄譚『ニーベルンゲン』の世界観、社会の破局に直面した人類学者の理論と実践の問い、３・１１以後の文学表象の批判的考察、ポストモダン思想における世界の終焉論、などである。研究代表者は基調講演「世界の終わりの後で」をおこない、晩年のジャック・デリダがどんな「世界の終わり」の光景を思索したのかを、他者への応答、世界の自己破壊、生きものの共住の世界という異なる三つの場面に即して考察した。
・2018 年 9 月、ローマ大学で「核（エネルギー）1945 年から現在までの科学的・哲学的問い」に参加し発表した。研究代表者は、学術発表「核の表象と思想——『ゴジラ』と『シン・ゴジラ』のあいだで」をおこない、二つのゴジラ映画（1954 年の『ゴジラ』と 2016 年の『シン・ゴジラ』を比較して、核エネルギーの表象をめぐって考察をおこなった。ゴジラは人類が倒すべき敵であると同時に、原子力兵器の犠牲者でもあるがゆえに、日本独特の怪獣表現となっている。第五福竜丸事故や原子力の平和利用など、核エネルギーに関する日本の重要な転換期にゴジラ映画は誕生し、戦争の記憶と予感、原子力の軍事利用への拒絶と平和利用への期待といった社会的・歴史的背景を映し出している。だが、『シン・ゴジラ』では福島原子力事故を踏まえて、冷温停止されて宙づりになったゴジラといかに折り合いをつけるべきかが問われる。
・ほかにも、パリの国立東洋言語文化大学にて、2018 年 2 月にワークショップ「カタストロフィの試練に曝されるデリダ」をソフィア大学の Darin Tenev を招聘しておこない、2018 年 3 月に、阿部彩の講演会「日本の子どもの貧困」、佐藤嘉幸、田口卓臣、渡名喜庸哲とともにワークショップ「脱原発の哲学」を実施した。
・フランス以外にも、ポルトガル、スロヴァキア、カナダ、ハンガリーにて国際会議に参加して発表をおこなった。

２）国内での学術会議

海外での在外研究期間の前後には国内でも学術会議を開催した。2016 年 11 月、慶應義塾大学にて、佐藤嘉幸・田口卓臣『脱原発の哲学』の合評会を小出裕章や岩田渉といった専門家を招聘しておこなった。2018 年 12 月にカリム・シャハディーブを招聘して「枠組みの蘇生——現代日本映画におけるゾンビの形象」を、1 月にヨアン・モロ「人新世におけるカタストロフィのドラマトゥルギー」を開催した。前者は、ゾンビ映画の歴史と表現から終末論的ヴィジョンの可能性を考察するもので、後者はカタストロフィの語り方や効果を人新世の視座から再考するものである。2019 年 12 月、東京大学での合同シンポジウム「予測不能な天候」に参加し、気候変動と人文知に関する発表をした。

３）成果発表

カタストロフィに関する思想と表象に関する共同研究の成果は、日本語・フランス語・英語で多数公表され、学会発表も活発におこなわれた。また、翻訳として、ミカエル・フッセル『世界の終わりの後で　黙示録的理性批判』（法政大学出版局）を刊行した。〈世界の終わり〉の観念とともに生き続けるために、政治的なもの、社会的なもの、人間的なものの交差する地点に現れる破局的主題を取り上げ、近代の諸概念を問い直す哲学的著作である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Yuji NISHIYAMA	４．巻 -
２．論文標題 Hantologie de Fukushima	５．発行年 2018年
３．雑誌名 TERRAIN	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 西山雄二	４．巻 515-15
２．論文標題 68年5月から遠く離れて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuji NISHIYAMA	４．巻 42
２．論文標題 L’adresse de l’entre-nous : l’interpretation plastique de Hegel chez Jean-Luc Nancy	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Les Cahiers philosophiques de Strasbourg	６．最初と最後の頁 127-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yuji NISHIYAMA	４．巻 1
２．論文標題 What remains of Philosophers’ Reflections on University?	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan	６．最初と最後の頁 92-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　6件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 Yuji NISHIYAMA
2．発表標題 La pensee et la representation du nucleaire : entre Godzilla et Shin-Godzilla
3．学会等名 INALCO
4．発表年 2018年

1．発表者名 Yuji NISHIYAMA
2．発表標題 The Intercultural Translation between Chora and “Ma”: Derrida’s visits to Japan
3．学会等名 Derrida Today 2018（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Yuji NISHIYAMA
2．発表標題 Le propre de l’homme et la deconstruction de la mort : autour de Jacques Derrida, Seminaire : La peine de mort
3．学会等名 XXVIIe Universite d’ete de l’Association Jan Hus（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Yuji NISHIYAMA
2．発表標題 Thought and Representation of Nuclear Energy in Japan: Comparative Analysis of the Films Godzilla and Shin Godzilla
3．学会等名 Nuclear (power), a Scientific and Philosophical Question from 1945 to Today（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 西山雄二
２．発表標題 『嘘の歴史　序説』について
３．学会等名 デリダと宗教的なもの
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuji NISHIYAMA
２．発表標題 Before the Door in the Land of the Rising Sun: Jacques Derrida in Japan
３．学会等名 Creation and Destruction of the World（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuji NISHIYAMA
２．発表標題 Une zoo-politique du mensonge chez Jacque Derrida
３．学会等名 DERRIDA-le don de la differance（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuji NISHIYAMA
２．発表標題 歓待の試練に曝されるデリダ
３．学会等名 カタストロフィの試練に曝されるデリダ
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuji NISHIYAMA
２．発表標題 Hauntologie de Fukushima
３．学会等名 La Catastrophe devant soi（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuji NISHIYAMA
２．発表標題 After the End of the World: in an Apocalyptic Tone by Jacques Derrida
３．学会等名 In memoriam Jacques Derrida（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuji NISHIYAMA
２．発表標題 What Remains of Philosophers’ Reflections on University? - Kant, Jaspers, Derrida
３．学会等名 Sovereignty trouble（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuji NISHIYAMA
２．発表標題 Critical Theory and Climate Change
３．学会等名 Asia Theories Network, Tokyo Workshop "Unpredictable weather"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 西山雄二
２．発表標題 嘘をめぐる政治と哲学
３．学会等名 ことばと政治　いま、哲学は人間をどう問うているのか（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 Yuji NISHIYAMA	４．発行年 2018年
２．出版社 Mimesis	５．総ページ数 330
３．書名 DERRIDA & LEVINAS. An Alliance Awaiting the Political. Une alliance en attente de politique	

１．著者名 ミカエル・フッセル	４．発行年 2020年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 386
３．書名 世界の終わりの後で	

１．著者名 Katalin Bartha-Kovacs. al.	４．発行年 2019年
２．出版社 JATEPress	５．総ページ数 386
３．書名 Homme nouveau, homme ancien : autour des figures emergentes et disparaissantes de l'humain	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	リュッケン　ミカエル (Lucken Michael)	フランス国立東洋言語文化大学・Centre d'etudes japonaises・Professor	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	テネフ　ダリン (Tenev Darin)	ソフィア大学・Faculty of Slavic studies・Associate Professor	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	コーエン　ジョゼフ (Cohen Joseph)	ダブリン・カレッジ・School of Philosophy・Assistant Professor	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	オンブロージ　オリエッタ (Ombrosi Orietta)	ローマ大学・School of Philosophy・Professor	
その他の研究協力者	渡名喜　庸哲 (Tonaki Yotetsu) (40633540)		
その他の研究協力者	田口　卓臣 (Taguchi Takuomi)		
その他の研究協力者	佐藤　吉幸 (Sato Yoshiyuki) (90420075)		